

追録

支部研修会議演録



浪江町復興支援の今までの取り組み

中小企業診断士福島県支部会員 佐藤 健一 氏

皆さん、おはようございます。前座を務めます佐藤と申します。今、支部長のご案内のとおり、私どもの診断協会ですが、私個人的には二本松の中心市街地活性化協議会のタウンマネージャー、主に商工会議所の事業でございまして、こちらの事務局をやっている手前、避難されてきた浪江町の方々と連携した活性化というものをたまたま進める立場にございまして、そういう意味で、一部には浪江の方もいらっしゃると思うのですが、一応前提ということでご報告させていただきたいと思っております。もちろん、中身につきましてはあくまでも私の個人的なコメントでございまして、協会のほうのコメントではないということをお含みおきいただきたいと思っております。

お話をいただきましたのが、浪江町復興支援の経過ということでございまして、支援するなどというのは私にはとてもおこがましい話でございまして、浪江町の移転された商工会の皆様を中心として、むしろ二本松も風評被害が大変なものでございまして、にぎわいづくりにむしろ大変ご活躍いただいていると、改めてこの場をお借りして感謝申し上げたいと思っております。

支部長のごあいさつにございましたように、10月4日にまちづくりの専門家の佐藤先生も交えまして、役場の調査ということで現地に入らせていただきました。これが役場庁舎内でございますが、前のページにありましたように、3月11日のままカレンダーがストップしているという状況でございます。

これが新町商店街、今日お越しの方も商店街の皆様が多いわけなのですが、行ってみて予想以上に地震の被害が大きくびっくりいたしました。本当に事故後すぐに逃げろということで避難したわけでございますので、本当にそのままの状況でした。

これが津波に襲われました請戸漁港の様子でございます。視察団の一番右にいらっしゃるのが佐藤教授、これが高橋さんという二本松のまちづくりNPOのリーダーです。そして私と佐々木支部長、こちらの方は経産省から支援にいらっしゃるお役人さんでございます。後ろに見えますのが第一原発でございます。津波の後というのは、実際、半年過ぎた後でございましたが、既に河原なのか田んぼだったのか何なのか分からないくらいになっていたという状況でございます。非常に浪江町は広がりのあるところでございますので、それだけ津波の被害が広範囲だったということです。

これが原発が一番近づきまして双葉の海水浴場の近くまで参ったものです。こうやって家畜がそのままになっています。今日は大変タイムリーな勉強会になったわけなのですが、この赤でくりましたのが浪江町で、東西に非常に長く伸びた町でございます。隣接して葛尾村、二本松市、川俣と隣同士になっているわけなのですが、非常に原発の直接的な被害被っているわけですね。注目いただきたいのは町場のところですね。港から中心市街地にかけて非常に線量が低く、この日、10月4日は、浪江町の中心部、原田商工会副会長のお店の前ですが、車の中で0.50マイクロシーベルトでございました。夕方帰ってきて二本松の街なかで測ったら0.75シーベルトということで、二本松のほうが線量が高くてびっくりしました。収束宣言ということで、20キロ圏の警戒区域圏が取り払われるということになりますとどうなるかということ、私は、福島県全部が同じ問題に直面するのかなという感じがいたします。

今度は連携復興の取り組みの経過を報告いたしますが、これは浪江町の災害対策本部から我々二本松のほうにも説明いただいた資料でございまして、絆をつくるのだと。そのために、たまたま役場が二本松市に移ったということで、大変我々もお世話になったわけなのですが、タイアップしたイベントをやっ

ていこうと、それについて浪江も各イベントをやる上で二本松と連携していくのだということでございます。

個々の事業者の方の事業再開ということですが、我々中心市街地活性化協議会で空き店舗創業というものをかなり進めておりましたので、これはすぐに取りかかりました。「杉乃家」さんという飲食店でございますが、駅前空きテナントに何とかお入りいただきまして、これはびっくりしたのですが、写真のとおりオープンから行列ができる店ということで今まで続いておまして、大変地元の活性化では勉強させていただいたということでございます。

夏ごろから、商工会・商店街有志が役場のほうに再結集して、民間の立場で行動を始められたということでございます。夏の大きなイベントの盆踊りを二本松市の夏祭りとタイアップして何とか調整してやりました、大変にぎわいました。ありがたいのは、二本松の地元のお店も、イベントのときだけですけども、売上が前年よりも3割から4割アップしたということでございます。非常に象徴的な出来事だったのですが、夏祭りですので、もともと焼きそばを当然露店でやるわけなのですが、二本松の方々が、浪江の焼きそばがお店を出すのだから二本松の焼きそばは売れないだろうという話をしていたのですが、とんでもない、二本松の焼きそばも1時間で全部売り切れになったということがございました。

11月には、最大のイベントであります十日市を駅前の交流センター周辺で開催されました。私もオープニングのセレモニーに参加させていただきました。「まちづくりNPO新町なみえ」ということで、民間の復興主体が商店街の方を中心に設立されまして、営利事業的なものに発展するのは当分まだ先だろうと、まず、そういう生活支援ということでやっていこうということです。これは9月初旬の勉強会でございますが、佐々木部長がいろいろご案内しているわけですが、中に写っているのは佐藤滋先生です。佐藤先生は福島市の復興計画の検討委員長をされておりまして、二本松もずっとお世話になったものですから、お帰りのときに顔を出していただいて、浪江のほうのミーティングにも参加いただいたという経緯でございます。

震災前から絆づくりを実はやっていた方々がいらっしゃるというので資料をお借りしてきたのですが、「だるまスタンプニュース」というものです。浪江の商工会のスタンプ会なのですが、関心するのは、毎月、地域のコミュニティ情報、文化情報を発信されていまして。震災前の2月は裸参りなどの地域の情報を発信しています。裸参りを来年2月に復活したい、これは次の目標かなという感じがいたします。12月はイルミネーションということです。11月は、十日市のご案内がございまして、10月は「なみえ焼きそばB-1グランプリ」ということです。今でこそなみえ焼きそばを知らない人はいません。日本人はみんな知っているわけなのですが、誰が最初にそれを掘り起こしたのかというところで、地域の伝統文化ということを言うわけなのですが、やはり、この方々にかなり活躍してもらわなくてはいけないということだと思います。

今後の課題ということで、仮設段階の生活支援というものが非常に急務になっているということでございます。広々とした浜でございますので、住まいがあったわけなのですが、仮設の場合だと狭くて、これはログハウス調で非常に人気の高い仮設住宅を見せてもらったときなのですけども、いろいろな問題があると。ごみ処理をはじめそういうソフト面の問題、それから買い物、たまたま我々が行きましたときにはヤクルトのおばさんが来ていましたけれども、非常に各仮設は郊外のグラウンドとか急ごしらえしたものですから、そういう生活の足の問題があります。買い物バスというものを1週間に2回、ベニマルさんが今やっているということでございます。

お手元の資料のご案内が遅れたのですが、役場のほうでわざわざ作っていただいて頂戴しました資料、

佐藤報告資料1というものがございます。これは今の避難の状況でございます。それから、資料2というもの、これは今月の2日に浪江町の復興検討会議で出されたたたき台ということでございまして、今日のニュースにありましたように、昨日またこの会議がありまして大きく中身が変わっているわけなのですが、後でご報告しますが当面の復興の目標というものが示されております。それから、報告資料3というものが、今報告しましたものですが、これまでの経過のスクラップでございます。資料4、これは後で読んでいただければおわかりになるのですが、私どものほうで課題と今後の方向というものをまとめたものでございます。

資料の主なところをまとめてご報告いたしますが、12月現在で2万1,000人いらっしゃる方のうち、県内に移転避難されている方が1万3,965人、県外が7,070人いらっしゃるということでございます。仮設として、浪江町の方が入っていらっしゃるのをご覧のとおり27カ所で、県内の1万3,000人のうち全部で4,783の方が仮設に入っているということだと、仮設住宅に入っている方は3分の1ぐらいで、ほとんど借上住宅のほうに入っている方が多いということでございます。そうしますと、借上住宅に入っている方のコミュニケーションが今非常に問題になっているということを知りました。

一方で、仮設住宅というのは非常に高齢の方が多く、大家族で住んでいらっしゃる世帯が多いということですので。どうしても借上ですとスペースの限界がございますので、おじいちゃん、おばあちゃんがスピノフして仮設のほうに入るということで、そういう点での問題が起きているということを知っています。

直後からの避難の状況でございますが、上のグラフのように、県外の方々が続々と県内に戻っていらっしゃる。県内でも、下の方にございますように、県北のほうに非常に人が集まっている。一時、会津・猪苗代のほうの避難も多かったのですが、だんだん中通りに戻ってきているという傾向がございます。

問題なのは、県北の仮設でも、例えば二本松の場合、1,000戸の仮設をつくったわけなのですが、実際、11月現在で2割が余っていて、81.9%の入居率ということでございます。福島市に至っては70%ですから、3割がまだ空いているということです。この辺がやはりこれからの課題で、一遍にみんな戻れないので中間的なところの居住条件を改善するという話がされているわけなのですが、やはり、避難している方のニーズに合ったものをしっかりつくっていかないとミスマッチが起きていく、この辺がまちづくりの重要なところだろうと思います。実際このとおり、福島や郡山などまだまだ借上住宅の余地があるところについては、どんどん今、避難されている方が戻ってきているわけなのですが、仮設には入らないで、みんなアパートに入っているという現状でございます。

方向にまで行きませんが、着想ということで、住民ニーズに合ったまちづくりをどうやって進めるか、なおかつ住民の方自ら復興に立ち上がっていただくかということで、成功例というわけにはいきませんが、佐藤滋先生に長年ご指導いただいた竹田根崎のまちづくりを最後にご紹介したいと思います。

ここは、沿線400メートルの旧街道沿いの商店街、竹田地区と根崎地区という2つの町内なのですが、この県道を改良して倍に広げて両側のまち並みをつくり直すという話になりまして、急遽、地元のまちづくりが始まったということでございます。藩政時代からの非常に古いまちでございますので、そういう資源が集まったところは地域資源を活用して、土蔵を活用した居酒屋とかミュージアム、博物館とかそういうものを中心に活性化していこうということです。真ん中は非常に空き地が多い部分がございますので、ここはむしろ新しいものを呼んでこよう。一番東のほうで問題なのは、かなり商店街でお店をやめている、あるいは今度の道路改良を機にやめてしまうという方が多くて、ここは佐藤滋先生のご指導で、これから小売商をまちの中に増やそうと思ってもなかなか難しいから、福祉・介護とかそうい

うものを重点にやっっていこうではないかということで活動したということでございます。

これは平成8年度、9年度に、市、商工会議所、県のほうにもお手伝いいただいて、まちづくり基本計画というものをつくりました。これは南と北が逆で下が北なのですけれども、一番大物というのは大七酒造です。ここを多品種少量生産ということで郊外に行かないで地元に残る。そして、ファクトリー・パックといいますか、むしろお客さんと呼んでくる中心として機能してもらおうということでした。ただ、今の酒造りをやめるわけにはいきませんので、道路の拡張に伴って、脇に新しいプラントをつくりながら徐々にパイプをつなぎ直して、3年がかりぐらいでラインをつくり直すということでもございましたので、スペースが今の倍近く欲しいということです。そこで、周りのお店と区画整理で土地を交換してもらって、移転したお店はそこで多機能的な集積をつくるというものをやりました。これは法律に則った区画整理では時間と手間がかかるというので、全く民間のお話し合い、住民のまちづくり組織が主導して、大学なり我々コンサルタントが間に入ってそういうものも進めていき、併せてまち並み整備、それから、鯉川という川の河川改良がちょうど並行してありましたので、その川並みの整備を歴史のまちづくりのイメージでやっっていこうということで始まったわけです。

この計画自体、9年度、10年度で年間100回ぐらい、委員会だ、説明会だとやったわけなのですが、やはり突貫工事でやりましたので、なかなか住民等への普及が十分ではないということで、11年度以降は大学に入っただきまして、この写真のように住民に皆さんお集まりいただいて、特に高齢の方、ご婦人方、住民の合意形成とまちづくり推進体制をつくっていったということでもございます。

最終的な成果としては、まち並みづくりで景観協定、単に見栄えを統一するというのではなくて、みんな考え方を同じにしてまちを協力してつくっていったというものを景観づくり協定というものにまとめまして、8割の地権者の方にはんこを押していただきました。これは、県の景観条例による住民協定ということでは、町場では第1号でできました。具体的には、法律に基づいた建築協定ではございません。あくまでもガイドラインということですが、お互いが住んでいていいまちにするために、住まいのあり方、コミュニティのあり方も含めてガイドラインをつくって合意したということでもございます。

ここに至るまで、佐藤先生及び近間の研究室を含めて、延べ50人以上になりますか、大学院の修士課程、博士課程、それから学部ゼミの3年生、4年生と、AKB48ではないですが、50人ぐらい入って、うち10人ぐらいは現場に張り付いてずっと調査やワークショップをやってもらいました。これが初動期の「ガリバー地図」づくりということで、まちの中を何回も歩いてもらって、どんな問題があるか、あるいはどういうまちにしようか、どういうものをつくろうか、どういうイベントをやるかということ、みんなで大きい地図に書き込んでお話し合いを始めたということも積み重ねました。最終的には目に見える形ということで、まち並みデザインの100分の1の模型、400メートルの街路でございますので4メートルの模型になるわけなのですが、これを大学が一つ一つ聞き取り調査をして、現況をつくって、そこからどんなふうに住んで替えるかというものをつくってまとめていったということでもございます。

非常に成果として大きいのは、最終的に活動拠点、あくまでの民間のまちづくりの拠点ができた、居場所と絆の拠点ということでもございますが、これが非常に大きかった。もちろん、県なり市からは家賃などの補助をいただいたわけでもございますけれども、単にまちづくりのお話だけではなくて、下の写真にありますように、お祭りのときには大会社の方に急遽、お祭り博物館ということでサービスしたりという事業をやったということでもございます。

今まではまち並みづくりだったわけですが、次の段階で住民主導の産業振興・創業支援というものにつながっていったということでもございます。15年度に国のモデル調査を入れまして、最初に言いました

ように、もう商売をやめてしまう、あるいは空き地・空き店舗が多いところで、今は商売をやっていない方あるいは町外の方を呼んで来て何とか店をやらせよう。写真にありますように、たまたま土蔵を使ってお母さんと娘さんで居酒屋を創業するというものをみんなで応援して成功したものですから、二匹目のどじょうを探そうということで、これも大学も入ってもらってやりました。

まず、ご覧のとおり、奥さん方、一般サラリーマンの方、あるいは子どもさんも入れてまち並みの活動拠点でワークショップやセミナーを繰り返しました。次の段階は実行ということで、こういう修了証書というものを発行していただきました。どなたでも参加できるわけなのですが、「あなたは優秀な成績をもって竹田根崎まちづくり推進会議創業経営革新セミナーを修了しました。今後、この経験を生かし、竹田根崎活性化の取り組みをする場合、まちぐるみで協力して応援することをお約束いたします。ぜひ頑張ってください」ということで、竹田根崎まちづくり振興会の会長、矢島忠治さんの名前で、何のことはないお墨つきといえますか、これをつけて、この人のところはみんなで応援しようという形で意思統一を図ったということでございます。

真ん中の写真は、ワインのカフェを開業するという奥さんです。私が立ち寄りまして、信用金庫の次長にビジネスプランを説明して、700万を無担保で出してくれということでございます。下は、実際にデザイナーの先生が店舗の設計に立ち会って、セミナーだけではなく実際の事業を細かに指導したということでございます。

何軒か創業するという成果がありましたが、一番は、当初の予定どおりまちなかの薬局の空き店舗のところに通所介護施設を誘致できたことです。ただ、まちなかにそういうものを持ってきたものですから、なじみがなくてお客さんが全然来ない、これは困ったということで、まさにさっきの錦の御旗ではないのですが、地元のNPOがイベントをここでやりました。非常に大きいお庭のあるお宅を借りているわけでございますので、そこで秋の園遊会ということで餅をついたりいろいろな露店をやったりというイベントをやってお客さんを集めたということでございます。

下の写真でございますが、イベントに来たお年寄りに、ちょっと中を見ていってくださいということで内覧会を繰り返しました。こういうことをやっているうちに、非常にまちなかの施設で利便性が高いということもございまして大繁盛で、今はこれに関連したグループホームといえますか、高齢者のそういう集合住宅、そしてまた新しい施設をこのNPOでつくっております。右下の写真をご覧になりますように、まちなかでございますので、子どもも来て、まさにコミュニティの中心的な役割を果たしているということでございます。

この通所介護施設はまちづくりの精神で運営しておりまして、非常に伝説の介護施設になりつつあります。というのは、かなり重篤な、ほとんど寝たきりで車で送り迎えしていたお年寄りがびんぴん立って歩くくらいに回復してしまうということでございます。何をやったのかといえますと簡単なのですが、介護をされる側ではなくて介護をする側になってもらう。例えば、近くに畑があって、おじいちゃんがいらっしゃれば、「おじいちゃん、ちょっと畑仕事を手伝ってよ」と無理やりお願いしてやってもらうわけなのです。そのうち、介護されるほうが元気になってしましまして、今はうちを出て介護施設に行くときに、介護施設に行くとは言わないそうで、「仕事に行ってくる」といっておじいちゃんがうちを出ていくということでございます。たまたまこういう例も生まれたということで、住民のそういうニーズを集めて、どう前向きにそういうまちづくりの組織をつくっていくのかというところの一つのヒントということでご報告いたしました。

ありがとうございました。